

発達障害がある人のキャリア発達と 職業生活の課題に関する文献的検討

- 知名 青子（障害者職業総合センター 上席研究員）
田中規子・五十嵐意和保・八木繁美・近藤光徳・永岡靖子
・堂井康宏（障害者職業総合センター）

問題意識

fact

- ✓近年の障害者雇用施策の進展に伴い、民間企業で雇用される発達障害者の数は著しく増加
- ✓支援対象者の年齢層は学齢期から成人期へと大きく広がり、就労支援に求められるニーズも変化

Point of view

- ✓発達障害のある成人の職業生活は、職場環境と本人の特性との相互作用の中で、多岐にわたる困難に直面する。
- ✓ライフステージの移行期（トランジション）を含めた長期的な視点からの分析が不可欠

Q

- ✓本人のキャリア形成や職業的アイデンティティの構築に影響を与える要因とは？

研究目的・方法

What

国内外の学術論文におけるシステマティックレビューやメタ分析、長期コホート調査等から、発達障害のある成人のライフキャリアや職業生活上の課題に関する最新の重要な知見を紹介する。

How

文献調査。選定した文献は以下の条件に合致したものの中から、職業上の課題と密接不可分な関係にある「長期的なキャリア」及び「職業生活面」に関する4本の研究を取り上げ、その概要を紹介する。

- ✓①発達障害のある成人の職業生活上の課題に関する文献について、**2020年以降の研究。**
- ✓②対象集団として成人期の発達障害者を扱っていること、職業生活等の機能的アウトカムを扱っていること。
- ✓③研究のエビデンスレベルⅠ（システマティックレビュー及びメタ分析）、レベルⅡ（介入研究・RCT）、レベルⅢ（コホート）に該当する論文であること。

各論文概要

出典/研究デザイン/ 対象者・データの特徴/調査期間	主要な職業的指標/主要な知見
Hickey, E. J. et al. (2024)/ 加速縦断的デザイン/ N=341 自閉症成人、うち28.1%が知的障害なし /22年	競争的雇用時間数/知的障害のない群において、競争的雇用 時間数は30代半ばをピークとする曲線軌跡を描き、その後 減少する。
Bury, S. M. et al. (2024) /潜在クラス分析/N=2449 自閉症成人（自己申告）、自閉症特性を分析/8 年	就労状況の確率/4つの異なる就労プロファイル（安定した 失業、安定した就労、就労確率増加、就労確率減少）を特 定。安定した就労の予測因子を解明。
Lauder et al. (2022)/システマティックレビュー/ 対象研究数：143件. 分野：医学、健康科学、心 理学、ビジネス・マネジメントなど.介入：薬理 学的介入（例：服薬）、心理社会的介入（例： グループ療法、支援ネットワーク、対人関係支 援） /	<ul style="list-style-type: none">・介入の有効性（職場での適応、症状の軽減、支援の受容 性など）・効果メカニズム（介入がどのように効果を発揮するか）・支援へのアクセス障壁（自己認識の欠如、開示の困難さ など） <p>/1. 薬理的介入の優位性 2. 心理社会的介入の有効性 3. 支援へのアクセス障壁</p>
Varrasi et al. (2023)/ナラティブレビュー/ADHD成 人研究（2010以降）、多分野、臨床的・神経心 理学的プロフィールに焦点/2010～2022年の文献	<ul style="list-style-type: none">・ADHD成人の学業成果・職業成果（就業状況、職業的安定 性、キャリア満足度等/ 1 成功の予測因子（早期の薬物治療、 継続的教育支援、認知機能への介入）、 2 学習支援戦略 （特性に合わせた個別化支援、情動調整を含む包括的学習 支援、生涯学習をさせる環境整備）

今後の課題

- 発達障害者の長期的キャリアについては知見が蓄積し始めたところである。今後はこれら知見を整理し、国内の発達障害者の実態についてさらに調査を進めていきたい。